

去月二十五日の御文、同じき月の廿七日の酉の時に来たりて候。仰せ下さるゝ状と、
 又起請きしょうかくまじきよしの御せいじ誓やうとを見候へば、優曇華うどんげのさきたるをみるか、赤しゃく
 梅檀せんたんのふたばになるをえたるか、めづらし、かうばし。三香明六通さんみょうろくつうを得給ふ上、法華經
 にて初地初住にのぼらせ給へる証果の大阿羅漢、得無生忍とくむしょうにんの菩薩しゃりぼつなりし舍利弗・目連
 ・迦葉等かしょうだにも、娑婆世界しゃばの末法に法華經を弘通せん事の大難こらへかねければ、か
 なふまじき由辞退候ひき。まして三惑未断さんなくみだんの末代の凡夫いかでか此の經の行者となるべ
 き。設ひ日蓮一人は杖木瓦礫じょうもくがりやく・悪口王難忍をものぶとも、妻子を帯せる無智の俗なん
 どは争いかでか叶ふべき。中々信ぜざらんはよかりなん。すへとをらずしばしならば人唯にわら
 はれなんと不便にをもひ候ひしに、度々の難、二箇度の御勘氣に心ざしをあらはし給ふ
 だにも不思議なるに、かくをど齋さるゝに二所の所領をすてゝ、法華經を信じ通とをすべし
 と御起請候ひし事、いかにとも申す計りなし。普賢ふげん・文殊もんじゆ等なを末代はいかんがと仏思おぼ
 し食めして、妙法蓮華經の五字をば地涌千界の上首上行等の四人にこそ仰せつけられて候
 へ。只事の心を案ずるに、日蓮が道をたすけんと、上行菩薩貴辺の御身に入りかはらせ
 給へるか。又教主釈尊の御計らひか。

彼の御内の人々うちにはびこって、良觀りゅうぞう・竜象定が計らひにてやぢやうあるらん。起請
 をかゝせ給ひなば、いよいよかつばら彼 奴 原 驕を攻 失ごりて、かたがたにふれ申さば、鎌倉の内に日
 蓮が弟子等一人もなくせめうしなひなん。凡夫のならひ、身の上ははからひがたし。こ
 れをよくよくしるを賢人聖人とは申すなり。遠きをばしばらくをかせ給へ。近きは武藏
 のかう殿守、両所をすてゝ入道になり、結句は多くの所領、男女公 蓮のきうだち、御ぜん等を
 すてゝ御遁世とんせいと承る。とのは子なし。たのもしき兄弟なし。わづかの二所の所領なり。
 一生はゆめの上、明日を期ごせず。いかなる乞食にはなるとも法華經にきずをつけ給ふべ
 からず。されば同じくはなげきたるけし氣 色きなくて、此の状にかきたるがごとく、すこし
 もへつら詔はず振る舞ひ仰せあるべし。中々へつらふならばあしかりなん。設ひ所領をめ
 され、追ひ出だし給ふとも、十羅刹女じゅうらせつによの御計らひにてぞあるらむとふかくたのませ給
 ふべし。

日蓮はながされずして、かま鎌 倉くらにだにもありしかば、有りしいくさに一定打ち殺さ
 れなん。此も又御内にてはあしかりぬべければ釈迦仏の御計らひにてやあるらむ。陳状

は申して候へども、又それに僧は候へども、あまりのおぼつかなさに三位房をつかはすべく候に、いまだ所労きらきらしく候はず候へば、同じ事に此の御房をまいらせ候。だいがくの三郎殿か、たきの太郎殿か、とき殿かに、いとまに随ひてかゝせて、あげさせ給ふべし。これはあげなば事きれなむ。いたういそがずとも内々うちをしたゝめ、又ほかのやつばらをもあまねくさはがせて、さしいだしたらば、若しや此の文かまくら内にもひろうし、上へもまいる事もやあるらん。わざはひの幸ひはこれなり。法華經の御事は已前に申しふりぬ。しかれども小事こそ善よりはをこて候へ。大事になりぬれば必ず大なるさはぎが大なる幸ひとなるなり。此の陳状、人ごとにみるならば、彼等がはぢあらわるべし。

只一口に申し給へ。我とは御内を出でて、所領をあぐべからず。上よりめされいさむは法華經の御布施、幸ひと思ふべしとのゝしらせ給へ。かへすがへす奉行人にへつらふけしきなかれ。此の所領は上より給ひたるにはあらず、大事の御所労を法華經の薬をもつてたすけまいらせて給ひて候所領なれば、召すならば御所労こそ又かへり候はむずれ、爾時は頼基に御たいじゃう候とも用ひまいらせ候まじく候と、うちあて、にくさうげにてかへるべし。あなかしこ、あなかしこ。

御よりあひあるべからず。よるは用心きびしく、夜廻りの殿原かたらひて用ひ、常にはよりあはるべし。今度御内をだにもいだされずば十に九は内のものねらひなむ。かまへてきたなきしにすべからず。

建治三年丁丑七月

日 蓮 花 押

四条金吾殿御返事